

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

暦より秋遅れくる水の音

間 浩太

〔評〕暦の上で九月は、秋旺んな時季。彼岸花が咲き、蟲が鳴き、名月が上がる、今年はず更に夏が長く思えた。流れる水、鏡の水の音に漸く訪れた今年の遅い秋。暦は人間の作った生活記録の集大成。地球の温暖化問題が心配されているが、やがては暦の修整も必要に迫られる時季が、こないとも限るまい。

密かなる神木の呼吸や秋深し

竹崎 光子

〔評〕九月の流水句会は、いの大国様献句大会を兼ねて実施した。その境内での吟行句である。「神木の呼吸や」は対象と一対となった「無我の境地」暑い夏の期間が長かっただけに「秋深し」に感慨も一入深いものを感じる。

一の鳥居花かんざしは百日紅

楠目 哲郎

〔評〕「花かんざし」は造花で美しく飾った

簪のことをいうが、この句は夏から秋の半ば頃まで咲き続ける「百日紅」を指している。鳥居が宮の顔とすれば、その奥にある百日紅は、さしずめ花簪ということだろう。宮の百日紅の花と組み合わせ、花簪と見立てた作者の詩的感覚はすばらしい。

爽涼や一筆書きの達磨像

伊藤 たみ

〔評〕達磨は中国禅宗の始祖。「爽涼や」で切れているところから、外気がさわやかで、すがすがしいということが前提としてある。墨を注がずに一気に書いた筆、その勢いは推して知るべし、必要以上に手も足も無い、眼光鋭い氣迫満ちた一筆書きの達磨像。

独り居の氣まま放題きりぎりす

小島 良

〔評〕独り居とあるから、家族は他に存在しないのであろう、暮しの内容が充分把握できないまま評するのは、おこがましいが、お許しいただいて……。生活のリズムが稍単調ではないだろうか。「こおるぎ」のことを、むかしはキリギリスと詠んだ、今いう「キリギリス」は「はたおり」と呼ばれていて「スイチョンギース」と鳴く緑色と褐色があて、主に昼鳴く。独り居とキリギリス、微妙な取り合

わせ「言い得て合点……」そうか、そうかとうなづいた。

一年は一年の古い遠花火 大川 節弥

狛犬の阿吽の呼吸秋暑し 友草 水月

水澄んでパノラマのように仁淀川 川村 博子

神木の高々残暑を遠ざける 刈谷 志津

秋の句座朱塗り御箸戴きぬ 津田 久美

手を打てば鯉近ずけり神の池 大西 昇月

秋風や製紙の街の水走る 井上 郁子

涼新た大国様の句会かな 川上こよね

大国は蜻蛉の空となつていし 川村千因子

こつこつと生きて楽しく秋刀魚焼く 森元二美子

風鈴の音にいやされし子猫かな 森岡 照月

子のことは話さぬ友と処暑の夜 秋田 律子

夏休み水に遊びて石拾う 弘瀬うき子

とび立ちつ又戻りしつ燕去ぬ 川村 愛

吹く風も流るる雲も秋めけり 筒井 文

長月の氣象変化の多き日々 筒井 眉躬

柏手の木霊に返る秋の宮 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」
締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

今月のごとも川柳

花火見てきれいと思う夏の夜

伊野小6年 山脇 旺

昨日のこと忘れて明日を楽しもう

神谷小6年 西川可奈子

夏の海キラキラ光る星みたい

伊野小6年 廣瀬 美由

お礼

去る9月9日(日)に開催しました「第28回チャリティバーザー」に際し、町内外の企業、町民、会員の皆さまから温かいご協力をいただきましたありがとうございます。

この収益金で、早速10月23日に独り暮らし高齢者の慰安会を開催しました。今後も福祉貢献に努力して参りますので、よろしくお願ひします。

伊野婦人会 堀尾 玉子

紙上をもちまして、厚くお礼申し上げます。